

伊勢物語『芥川』定期テスト対策問題 | 現代語訳・和歌・文法の頻出設問と解答

解答・解説

問1 答え：過去（伝聞過去）の意味。

「けり」はここでは過去を表す助動詞で、「～た・～たそうだ」と訳します。とくに『伊勢物語』のような物語の語り出し「むかし、男ありけり」の「けり」は、語り手が人から伝え聞いた昔話を語るニュアンス（伝聞過去）を含みます。なお和歌などで使う「気づき・詠嘆の『けり』」とは区別しましょう。

問2 答え：（その）女で、手に入れることができそうになかった人を、長年求婚し続けてきたが。

「え～まじ」で「～できそうにない」という不可能の打消推量。「得（う）」は「手に入れる・自分のものにする」。「よばひわたる」は「求婚し続ける」で、「わたる」は「ずっと～し続ける」という継続を表す補助動詞です。

問3 答え：イ（不可能）。

「え～まじ」はセットで「～できそうにない・～できないだろう」という不可能の打消推量を表します。「え得まじ」で「（自分のものに）できそうにない」。冒頭で「手に入れるのが難しい高貴な女性だった」と説明しているのです。副詞「え」は下に打消・不可能の語を伴って「～できない」を作る、と覚えましょう。

問4 答え：（女を）こっそりと連れ出して。

「盗む」は財物を盗む意味だけでなく、人目を忍んで連れ去る・駆け落ちのように連れ出す意味でも使います。ここは男が、長年思い続けた女をついに（親の許しを得ず）こっそり連れ出した場面です。「～出づ」は「外へ出す」の意。

問5 答え：①「盗み出でて」の主語＝男 / ④「え聞かざりけり」の主語＝男。

①は、長年言い寄っていた男が、ついに女を連れ出した場面なので主語は男。④は、女の「あなや（あれっ・あつ）」という叫びを、雷の鳴る騒がしさのために男が聞き取れなかった、という意味です。「え～ず（打消）」で「～できない」という不可能を表します。

問6 答え：順接の確定条件（～ので・～たところ）。

已然形+「ば」は順接の確定条件で、原因・理由（～ので）や、偶然・きっかけ（～したところ）を表します。「率て行きければ」は「連れて行ったところ／行ったので」。これに対し未然形+「ば」は仮定条件（もし～ならば）になる点と区別しましょう。

問7 答え：露さえ見たことのない、深窓で大切に育てられた高貴な身分の女性であること。

草の上の露という、ありふれた自然のものを「あれは何？」と尋ねている点がポイント。屋外の露を知らないほど、外の世界から隔てられて育った姫君だと読み取れます。この「世間知らずなほどの高貴さ」が、のちの結末（取り返される女＝身分の高い女）への伏線になっています。

問8 答え：「あれは何ですか」と、女が男に向かって言った。

「かれ」は遠くのもの（草の上の露）を指す指示語で「あれ」。「は何ぞ」は「は何であるか・何ですか」の意。

直前に「となむ男に問ひける」とあり、問いかけたのは女、問われたのは男です。連れ出された女が露を指して尋ねた場面だと押さえましょう。

問9 答え：直前に係助詞「なむ」があるため、その結びとして文末が連体形「ける」になっている（係り結びの法則）。

「となむ男に問ひける」の「なむ」は強調の係助詞で、結びの語を連体形にします。だから「問ひけり（終止形）」ではなく「問ひける（連体形）」。

係助詞「ぞ・なむ・や・か」は連体形結び、「こそ」は已然形結び、と整理して覚えましょう。

問10 答え：イ。

「なむ」は〔強意（確述）の助動詞「ぬ」の未然形「な」＋意志・願望の助動詞「む」〕。ここは「早く夜も明けてほしい／きっと明けてしまうだろう」と、男が夜明けを待ち望む気持ちを表します。

見分け方：「明け」（下二段動詞「明く」）のあとの「な」を強意（確述）の助動詞「ぬ」の未然形と取れば〔な＋む〕（＝ア・イのどちらか）。文脈が男の願望なので意志・願望のイが最適。エの係助詞「なむ」なら結びが連体形になるはずで、ここでは当てはまりません。

※補足：下二段動詞は未然形と連用形が同じ形（明け）なので、この「明けなむ」を〔未然形＋終助詞「なむ」（あつらえの願望「～してほしい」）〕と説明する教科書・参考書もあります。どちらで取っても「早く夜が明けてほしい」という大意は変わらず、この設問の選択肢の中ではイを選べば十分です。

問11 答え：実際には、無理に連れ出された高貴な女を、その身内（兄など身分の高い人々）が探し出して連れ戻したという出来事を、「鬼が一口で食べてしまった」と物語的に表現したもの。

この女は二条の後（藤原高子）がモデルとされ、その兄である堀河の大臣（藤原基経）らが、連れ去られた妹を取り返したと伝えられます。男の側から見れば、一夜のうちに女が突然いなくなってしまった——その不条理さ・あつけなさを「鬼一口」という怪異のたとえで描いているのです。「鬼」が本当の妖怪ではない点が最大のポイントです。

問12 答え：（女は）「あれっ」と言ったけれど、雷が鳴る騒がしさのために、（男は）聞くことができなかった。

「あなや」は驚いたときの叫び声で「ああっ・あれっ」。「え～ず（ざり）」は「～できない」の不可能。鬼に襲われた女の悲鳴が、雷の音にかき消されて男に届かなかった、という緊迫した場面です。

問13 答え：連れて来た女もいない。（男は）じだんだを踏んで泣くけれども、どうしようもない。

「率（ゐ）て来し」は「連れて来た」。「足ずりをす」は地団駄を踏んで悔しがるしぐさ。「かひなし」は「（泣いても）効き目がない・どうにもならない」。女を失った男の激しい嘆きが描かれています。

問14 答え：（あれは）白玉（真珠）でしょうか、何でしょうか、とあの人が尋ねたとき、「あれは露ですよ」と答えて、いっそ私も露のように消えてしまえばよかったのに。

「白玉か何ぞ」は女が露を見て尋ねたことばの引用。「人」はあの人＝女を指します。「消えなまし」は「消えてしまえばよかったのに（実際は消えなかった）」という、かなわなかった願いです。

問15 答え：文法名＝反実仮想。

「なまし」は〔強意「ぬ」の未然形「な」＋反実仮想の助動詞「まし」〕で、「（もし～だったら）～してしまえ

ばよかったのに」と、事実に反する**仮定とその後悔・願望**を表します。和歌全体には、あのとき露と一緒に自分も消えていれば、女を失うこんなつらい思いをせずにすんだのに、という男の深い悲しみと後悔の心情がこめられています。

問16 答え：連れ去られた（鬼に食われたとされる）女。

和歌の「人の問ひし時」は、本文前半で女が露を指して「かれは何ぞ（あれは何ですか）」と尋ねた場面に対応します。その「問うた人」＝あの女です。生きていたあのとき、と過去を振り返ることで、今はもういない女への思いがいつそう強く表れます。

問17 答え：白玉（真珠）や露は、美しいがはかなく、すぐ消えてしまうもの。女をそれにたとえることで、美しくも短命に終わった女のはかなさと、一瞬で失った悲しみを重ねて表現する効果がある。

「露と答へて消え」と続けることで、露＝消えるもの、というイメージが、女が消えてしまった結末と自然に結びつきます。美しさ・はかなさ・消滅を一語で連想させるのが「露」「白玉」の縁語的な働きです。

問18 答え：(1) からうじて＝やつのことで・かろうじて (2) あばらなる＝荒れ果てた・あちこち壊れて隙間だらけの (3) やなぐひ＝矢を入れて背負う道具（箆）。

(1)「からうじて」は「辛うじて」で、苦勞してようやく、の意。(2)「あばら」は屋根や壁が傷んで隙間だらけの荒れた状態。「あばらなる蔵」で荒れ果てた倉。(3)「やなぐひ（胡籐・箆）」は矢を差して携帯する武具で、「弓、やなぐひを負ひて」は弓矢で武装して見張る男の姿です。

問19 答え：女のモデルとされる二条の後（藤原高子）は、のちに天皇のきさきになる予定の高貴な女性だった。その女を身分の釣り合わない男が連れ出したため、兄たちが取り戻した――この「身分違いの恋が引き裂かれた」という現実を、直接書かずに「鬼に食われた」という怪異のたとえでぼかして表現したと考えられる。当時、高貴な女性の結婚は家の都合で決まり、本人や恋人の自由にはなりません。だから二条の后をめぐる悲恋は、そのまま書けば差し障りがある。そこで「鬼一口」という幻想的な言い方にしたので。

問20 答え：あ＝歌 / い＝在原業平（ありわらのなりひら） / う＝平安。

『伊勢物語』は、和歌を中心にして短い章段（段）を連ねた歌物語の代表作。主人公「昔、男」は在原業平がモデルとされ、平安時代前期に成立したとされます。同じ歌物語に『大和物語』『平中物語』があることもあわせて覚えておきましょう。

問21 答え：歌物語の例＝『大和物語』（または『平中物語』） / 六人の歌人の総称＝六歌仙。

歌物語の代表作は『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』の三つ。在原業平は、紀貫之が『古今和歌集』仮名序で挙げた六人のすぐれた歌人「六歌仙」の一人です（他に小野小町・僧正遍昭・大友黒主・文屋康秀・喜撰法師）。「三十六歌仙」とは数も時代も違うので混同しないよう注意しましょう。